

# 『万国公法』の翻訳に関わった中国人<sup>1</sup>

孫 建軍

## はじめに

西洋人宣教師の翻訳活動によって、おびたしい西洋知識が紹介されたことは、近代中国における西洋文化の受容の大きな特徴の一つとされている。W.A.P. Martin（マーティン、中国語名：丁韞良）訳『万国公法』は中国のみならず、東アジアにおいても、近代国際法の伝播、国際関係を研究する上で重要な書物として、様々な角度から研究が重ねられてきた。

一般的に、翻訳作業の現場では、宣教師が口頭で述べ、協力者の中国人が記録し、共同で構文を工夫するといった、いわゆる「口述筆録」の方法が取られていた<sup>2</sup>。『万国公法』の翻訳をめぐる、チャン・ジャンニンは次のように指摘している。

マーティンがどのように彼の協力者や編集者との間で、翻訳の方針などについて打ち合わせ、実際の仕事を進めたかが、訳本のテキスト上の諸問題を考察する際に重要であることはいうまでもない。残念なことに、それに関する情報は私の調べた範囲ではどの文献にも記載されておらず、従って翻訳の作業に当たって、文体の採用、表現の方法、特定の訳語の選択、また当時の中国人の読者にとって原文のどの部分が特に重要で、どこが比較的に重要でないのかという削除や補足の依拠する原則——則ち翻訳の仕事全体を理論的に支える思想というべきもの——などが、一体どのように定められたものなのかは、一切不明である。<sup>3</sup>

チャンの指摘のように、翻訳の諸相において、実態の究明は困難である。幸いなことに、ここ近年の資料の発掘によって、『万国公法』の翻訳作業に関わった人物に関する情報が少しずつ明確化しつつある。本稿では、これらの人物像を探り、用語や表現の選定に対する中国人の貢献について調べてみる。

## 1 中国人協力者：何師孟、李大文、張煒、曹景榮

『万国公法』が刊行に至るまでの研究は多く見られる<sup>4</sup>。そのプロセスは次のように要約できる。

<sup>1</sup> 本稿は教育部人文社会科学研究规划基金『西方传教士与近代中日語言文化互動』（10YJA740085）研究成果の一部である。

<sup>2</sup> 熊月之『西学東漸与晚清社会』（上海人民出版社、1994）を参照。

<sup>3</sup> チャン・ジャンニン（張嘉寧）『『万国公法』の成立事情と翻訳問題』、加藤周一・丸山真男編『日本近代思想大系 15 翻訳の思想』岩波書店、1991、387～388頁。

<sup>4</sup> 詳しくは、文末の参考文献を参照。

1862年夏より、マーティンは上海で *Elements of International Law* の翻訳を始めたようである。1863年春には、当時の米国公使である Anson Burlingame（中国語名 蒲安臣）に書簡を送り、「翻訳はまもなく完成する」旨を伝えているが、同年に上京して、11月に総理各国事務衙門の要人と会談した際には、翻訳作業はまだ終わっていなかったようである<sup>5</sup>。マーティンはできるだけ早く完成させる約束をするが、有能な役人に校正、公費出版も依頼している。マーティンの依頼を受けて、恭親王は4人の官僚に翻訳の「修飾潤色」を指示した。翻訳の校訂作業は半年に及び、ようやく刊行に至ったのである。

『万国公法』の凡例に、マーティンの翻訳を手伝った4人の中国人の名前、出身までが明記されている。

是書之訳漢文也本係美国教師丁韞良視其理足義備思於中外不無却裨益因與江寧何師孟通州李大文大興張煒定海曹景榮略訳数卷呈総理各国事務衙門批閱蒙王大臣派員校正底稿出資付梓

この4人はどのような人物であろうか。一人ずつ見ていこう。

4人のうち、通州、大興はいずれも北京にあるため、おそらくマーティンが北京に拠点を移してから助手と考えられる。マーティンはそれまで、アメリカ政府の通訳として一時期天津に滞在していたが、活動の中心は主に寧波や上海であった。マーティンは北京に到着後、寧波時代の旧友、海関総税務司在任中のイギリス人ロバート・ハート（Robert Hart、中国語名 赫德）の支援を得て、1864年5月に総理各国事務衙門の付近に「崇実館」（The Truth Hall Academy）という教会学校を設立している。設立当時、学校の生徒として、4人の若者と2人の児童がいた<sup>6</sup>。この学校のカリキュラムには中国の古典のほか、科学、医学、外科学、そして神学が盛り込まれている<sup>7</sup>。ちなみに、『万国公法』の扉に「京都崇実館存板」とあるが、学校名を取った形となる。

北京出身の李大文と張煒は崇実館の初期の生徒の2人であろう。時間の前後から見れば、この時点で『万国公法』の翻訳作業は既に終了間近で、2人の助手としての役割はさほど大きくないと考えられる。マーティンが2人の名前を挙げた理由は不明だが、北京生活を始めたばかりのマーティンにとって、日常生活や道案内、官僚との口頭での意思疎通などにおいて、2人の存在は大きく、感謝の念も含まれていることが推測できよう。

4人の中で最初に名前があげられたのは江寧出身の何師孟である。江寧は南京の近くの地名に当たる。何師孟は秀才の異名を持つ。『認字新法常字双千』（1863）を編集する際に、マーティンの助手を務めている<sup>8</sup>。また、『清史稿』の「卷493 列伝二百八十 忠義七」には、太平天国軍関係の記述の部分に、「何師孟」という名前が出ている<sup>9</sup>。マーティンは、

<sup>5</sup> W.A.P. Martin 著、沈弘・憐文捷・郝田虎訳『花甲憶記 一位美国伝教士眼中的大清帝国』広西師範大学出版社、2004、159頁。

<sup>6</sup> 王文兵『丁韞良与中国』外語教学与研究出版社、2008、92～93頁。

<sup>7</sup> Richard J. Smith, John K. Fairbank, Katherine F. Bruner 著、陳絳訳『赫德与中国早期現代化—赫德日記（1863–1866）』中国海関出版社、2005、239頁。

<sup>8</sup> 王文兵『丁韞良与中国』外語教学与研究出版社、2008、343頁。

<sup>9</sup> 「会欽差大臣向荣至、因與諸生周葆濂、夏家鉞及錢塘人金樹本謀結賊為内応、而使金和、李鈞祥、何師孟出報大營」とある。『清史稿』「卷493 列伝二百八十 忠義七」による。

太平天国と深く関わっている<sup>10</sup>ことから、関係者の何師孟を助手として雇うことは十分に考えられる。『認字新法常字双千』は上海で刊行されており、その刊行年から逆算すれば、何師孟は上海でマーティンに出会ったのであろう。この時期とえば、マーティンは既に『万国公法』の翻訳を始めており、何師孟も手伝っていたに違いない。その名前が凡例に一番に挙げられたのは、『万国公法』の翻訳に最も尽力していた証と言えよう。

上記の3人に比べ、マーティンの回想録の中では、定海（浙江省の北東部）出身の曹景栄に関する記述が最も多かった。曹景栄、一名子漁。西安で育ったため、官話に長ける。マーティンの方言と官話の先生であった。北京では、崇実館と二つのチャペルの管理を任せられ、マーティンに「優秀な中国人宣教師」と称えられている<sup>11</sup>。曹景栄は美華書館（The American Presbyterian Mission Press）でも働いており、書館が寧波から上海に移るとともに、上海に移住している。1863年夏に、マーティンと一緒に北京に移動した。『教会新報』、『中西聞見録』及び『万国公報』に度々投稿している<sup>12</sup>ことから、曹景栄は『万国公法』の翻訳の助手として、十分能力があったように思われる。

以上のように、マーティンが挙げた中国人助手は、いずれも当時の中国社会の正道から逸れた人物であったことが分かる。中には、何師孟のように、秀才の異名を持つ、いわゆる「条約港知識人（treaty port intellectual）」<sup>13</sup>と称すべき人もいたし、まだ教会学校の生徒である人もいた。これらの人物の資料は少なく、宣教師、またはその周辺の人びとの回想録に頼るほかない。数少ない資料から見れば、彼らの外国語能力に関する記述が一切ないことから、その翻訳助手としての役割が低かったことが伺えよう。同治3年8月付の恭親王の上奏本では「字句拉雑、非面為講解、不能明晰<sup>14</sup>」と嘆いている。

## 2 官僚校訂者——陳欽、李常華、方濬師、毛鴻図

『万国公法』の董恂による序に次のような内容が見られる。

謹良能華言以是諸就正爰屬歷城陳欽鄭州李常華定遠方濬師大竹毛鴻図刪校一過以帰之

また、上記の恭親王の上奏本にも4人の名前が出ている。

校閱其書、大訳俱論会盟戰法諸事、其於啓衅之間、彼此控制箝束、尤各有法、第字句拉雑、非面為講解、不能明晰、正可藉此如其所請。因派出臣衙門章京陳欽、李常華、方濬師、毛鴻図等四員、與之悉心商酌刪潤、但易其字、不改其意、半載以来、草稿已具

以上から、『万国公法』の校訂作業に4人、しかも「章京」という官職の官僚たちが携

<sup>10</sup> マーティンと太平天国の関わりについて、詳しくは王文兵前掲書、60～70頁を参照されたい。

<sup>11</sup> マーティン著、沈弘・憚文捷・郝田虎訳（2004）前掲書、161頁。

<sup>12</sup> 王文兵（2008）前掲書、342頁。

<sup>13</sup> Paul Cohen, *Between Tradition And Modernity: Wang Tao And Reform in Late Ch'ing China*, Harvard University Press, 1974, pp.6-7.

<sup>14</sup> 『籌辦夷務始末』（同治朝）巻27、台湾文海出版社、1966、25～26頁。

わっていたことが分かる。「章京」は満州語の発音の当て字であり、総理衙門大臣の秘書にあたるが、主に文書の管理や起草を扱う。位階では「四品」とされる高級官僚である<sup>15</sup>。

では、この4人はどんな人物であろうか。

まず、陳欽、済南の歴城出身、一名子敬。咸豊2年（1852）に挙人に合格。翰林院の官僚を務める。外交に長けており、中英北京条約で、輸入税の面で清の利益を守った。後に天津税関道に勤めていた時、日本使節の伊達宗城や柳原前光と会談し、日清修好条約を修正する日本側の要望を拒否している。清の外交利益を守った人物として、曾国藩の賞賛も得ている。

次に、李常華、鄭州出身、一名叔彦。この人物については、関連資料は見当たらない。

そして、定遠（安徽省）出身の方濬師は、一名子巖。咸豊5年（1855）に挙人、同治元年（1862）に総理衙門の章京に任命され、7年間洋務に携わった。任期中、章京より格上の総弁章京も務めた。後に三品頂戴広東肇陽羅道署両広塩運使（『広州府志』）とさらに昇進した。著書に『蕉軒随録』『蕉軒統録』などが見られる。

『蕉軒随録』には、『万国公法』の校訂に参加したことが書かれている<sup>16</sup>。

万国公法美国丁韪良所訳予與陳子敬李叔彦毛昇甫三君竭余年之力為之刪削考訂其中於中外交涉事宜頗多可採惟以鈎輅格磔之談律以中華文字不無勉強牽就並有語氣不合處有心者分別會未始不可捭理論辨因勢利導也全書俱在披覽可知

最後は毛鴻図。一名昇甫、大竹（現在の四川省東部）出身。『明清進士題名碑録索引』によると、毛鴻図は咸豊10年（1860）に第二甲第27名の順位で「進士」に合格している<sup>17</sup>。

マーティンによると、校訂作業は総理衙門で進められていた<sup>18</sup>。恭親王や方濬師の記述を含めて見れば、西洋の方言を中国語の文字で表すには無理があると思われていた。そのためか、マーティンが呈上した初稿は「文義」があまり通じないし、しかも、語気が合わない箇所もある。ここからも、『万国公法』の翻訳原稿の質の低さが伺えよう。しかし、「與之悉心商酌」とあるように、校訂作業は、対面し、相談を重ねながら進められていたことが分かる。意味を改めず、字面だけ変えるという方法を考えると、半年もかかったことは十分理解できよう。

最も興味深いことは、「悉心商酌」のプロセスだと思われる。校訂の現場では、文面の推敲、新しい表現の捻出が展開されていたことが容易に想像できるし、場合によっては、マーティンの中国人助手が加わっていたことも十分考えられよう。このプロセスによって、『万国公法』の翻訳作品としての完成度は徐々に向上し、後に中国だけでなく、日本までその威力を発揮し、近代語研究の分野においても、比類のない存在となったのである。

4人の章京との交際は、校訂作業にとどまらなかった。マーティンが自宅で電報の実験を披露した時、見学者として4人が派遣されていた。実験に全く興味を示さなかった4人

<sup>15</sup> 詳細は李文傑「総理衙門総弁章京研究」『史林』第5期（2010）を参照。

<sup>16</sup> 『蕉軒随録』、巻8「海洋記略」（同治11年、1872）。

<sup>17</sup> 朱保炯・謝沛霖編『明清進士題名碑録索引』上海古籍出版、1998。

<sup>18</sup> マーティン著、沈弘・憚文捷・郝田虎訳前掲書、159頁。

に不満を抱き、彼らを「文学においては大人だが、科学の前ではまだ子供だ<sup>19</sup>」と批判したが、マーティンは『万国公法』の英文序文で、そのうちの2人を高く評価している。

Of my four assistants, I may add, that one of them, was lately promoted to the office of assistant examiner in the literary tribunal; and another, a most diligent student of international law, was assigned to a post on a diplomatic mission.

内容から見れば、一人は方濬師であり、英文序文の日付の1864年10月11日の時点では、既に昇進していたように考えられる。もう一人は陳欽のことを指しているであろう。

### 3 『万国公法』の序文を書いた人びと

#### 3.1 高級官僚董恂

董恂（1807-1892）、揚州出身。文学者としても知られる。1861年から1880年まで総理衙門の大臣を務める<sup>20</sup>。マーティンとは1863年に初対面し、お互いに好印象を与えている。20歳以上の年の差をよそに、2人は友人となり、董恂は大臣の影響力を発揮して、マーティンの様々な事業に協力し、マーティンが書いた全ての本を熱心に通読し、多くの助言をしている<sup>21</sup>。同治5年（1865）に『瀛環志略』の再版を許可し、当時、最も有名な世界地理書の復刻を果たした。『万国公法』に寄せた序文では、マーティンを「好古多聞之士」と高く評価している。その後、国際法関係だけでなく、マーティンの多くの訳書に序文を書いている。たとえば『格物入門』（同治8年、1868）、『星輶指掌』（光緒2年、1876）、『公法便覧』（光緒3年、1877）、『公法会通』（光緒6年、1880）などが挙げられるが、そのうち、『公法会通』に関しては、元のタイトルだった『公法千章』を変更するなど、マーティンの訳書に深く関わっている。マーティンは「凡例」で「是書初擬名公法千章經董大司徒更定改名公法会通」と記している。

#### 3.2 下級官僚張斯桂

張斯桂（1816-1888）、一名魯生。寧波出身。若い時から西洋に関心を持ち、咸豐5年（1855）に寧波で中国初の蒸気船が購入された時、船長を務めた。翌年海賊を撃退した功績が称えられ、「訓導」という下級官職に推薦された。近代史上有名な李善蘭や容闕と親交が深く、李鴻章や曾國藩の幕僚も務めている。後に駐日副使に任命されていることは既に周知のとおりである。

マーティンの旧友として、寧波時代から交際が続いていた。マーティンは張斯桂のことを中国一流の知識人と見ていた。1863年に上海で再会した際、『万国公法』の訳稿を見せた。張斯桂は中国が将来世界で一席を勝ち取るために有益な書物だと認識し、進んで序文を書いた。その内容を「訳本に艶を与えた」として、マーティンは高く賞賛している<sup>22</sup>。

この時点では、『万国公法』の翻訳はまだ完全には終わっていない。張斯桂は序文で世

<sup>19</sup> 同上、202頁。

<sup>20</sup> Richard J. Smith, John K. Fairbank, Katherine F. Bruner 著、陳絳訳（2005）前掲書、131頁。

<sup>21</sup> マーティン著、沈弘・惲文捷・郝田虎訳前掲書、240～243頁。

<sup>22</sup> 同上、137～139頁。



界情勢を全面的に分析した上で、中国人は自ら変革を求めなければ国家の振興は実現できないと訴えている。

序文のない書物は、その価値が疑われる。同様に、序文を書く人の地位が高ければ高いほど、書物の見栄えもよくなる。しかし、董恂のような高級官僚の序文と下級官僚の張斯桂の序文が並ぶのは極めて異例のことと言わざるをえない。当時の様子は知りえないが、マーティンの強い主張と董恂の温かい配慮があったのかもしれない。

#### 4 『万国律例』から『万国公法』へ

近代中国において、国際法の翻訳は『万国公法』が最初ではなかった。30年代に林則徐の命令で、『各国律例』の書名で一部翻訳がなされている。『万国公法』を『各国律例』と較べて、両者の相互関係を研究した結果、用語の継承関係がないと指摘する学者がいる<sup>23</sup>。

用語の継承はなくても、マーティンが『各国律例』を意識していたことは『万国公法』の凡例で察しえる。

是書所録条例名為万国公法盖係諸国通行者非一国所得私也又以其與各国律例相似故亦名為万国律例云（凡例）

ここで言う『各国律例』はおそらく林則徐が翻訳をさせたものであろう。そして、『万国公法』の別名として『万国律例』を挙げている。

この『万国律例』のタイトルは、実は、刊行直前まで使用されていたようである。張斯桂の序文には、

統觀地球上版図大小不下数十国其猶有存駕者則侍其先王之命載在盟府世世守之長享勿替渝此盟神明殛之即万国律例一書耳

とあり、恭親王の上奏本（1864年8月30日付）にも、三箇所見られる。

- 臣等因於各該国彼此互相非毀之際、乘間探訪、知有万国律例一書。欲徑向索取、并托翻譯、又恐秘市不宣
- 帶同來見、呈出万国律例四本、声称此書凡屬有約之国、皆宜寓目、遇有事件、亦可參酌援引（同上）
- 臣等查該外国律例一書、衡以中国制度、原不尽合、但其中亦間有可采之处。即如本年布国在天津海口拘留丹国船只一事、臣等暗采該律例中之言、与之辨論。布国公使、即行認錯、首俯無詞、似亦一証（同上）

それに対して、董恂の序には、『万国公法』が使用されている。

<sup>23</sup> 詳しくは、Rune Svarverud（魯納）「万民法在中国—国際法的最初漢訳、兼及『海国図志』の編纂」『中外法学』（北京大学法学院編）巻12第3期（2000）を参照。

今九州外之國林立矣不有法以維之其何以國此丁韞良教師万国公法之所由訳之

このように、『万国公法』という書名は最初から決まっていたわけではなく、『万国律例』が変更された形で成立したことがわかる。董恂の序文の日付は、上記の中で最も遅く、また『公法会通』のような書名変更という事実から、総理衙門大臣の董恂は何らかの形で影響があったかもしれない。

## 5 『万国公法』における「～権」

『万国公法』はマーティンと4人の協力者の翻訳、さらに4人の章京の「修飾潤色」を経て、次第に完成度が高められたことは既に述べたとおりである。ここで、「～権」を例として、その完成度を検証したい。

マーティン訳『万国公法』では、西洋諸国で尊重されている「権」が多く使用されている。短文の形で現れたものが多く見られる。目次だけを見ても、「自治自主之権」「制法之権」「行法之権」「司法之権」「自護之権」「平行之権」「自然之権」「内治之権」「掌物之権」「往来之権」「局外之権」「立約之権」等が挙げられる。まだ単語として洗練されていないことが、新しい概念の翻訳の難しさを物語っている。

次のように、「～権」といった二字漢語にまとめられたものもある。

越権 均権 君権 原権 国権 私権 持権 執権 実権 主権 上権  
審権 専権 戦権 全権 総権 統権 特権 半権 物権 和権

これら21語のうち、漢籍に出典を持つものとして「君権」「持権」「執権」「主権」「戦権」「専権」などが挙げられる。ただし、「主権」は漢籍において「君主之権」という意味であったが、ここでは、「本国自主、而不聴命於他国」とあり、現代語の意味も付加されるようになった。

漢籍に出典を持たない「全権」には、次のような用例が見られる。

「全権」は1842年阿片戦争後、清国と英国の間で調印された中国史上初めての不平等条約とされる南京条約の正文に既に使用されている。「全権」という語は外国条約に使用され、後に定着したかと思われる。1844年に清国と米国の間で調印された望厦条約にも「大合衆国大总理璽天德特派欽差全権大臣駐中華顧聖」とあり、「全権」の使用例が確認できる。さらに、この語は1854年（安政元）、日本と米国の上に結ばれた日米和親条約にも使用され、日本語としても成立している。

他の14語はいずれも新しく創出された語であると思われる。中でも、「国権」「私権」「特権」などは、現代社会において、重要な法律用語となっている。

マーティンが約した漢訳『万国公法』との比較対照として、西周が明治元年（1868年）に訳した『万国公法』と津田真道が同年に訳した『泰西国法論』を例にとろう。この二つは法律関係書（前者は国際法、後者は西洋の憲法）として、日本の近代化に大きく貢献したとされている。

まず、西周訳『万国公法』における「権」を見てみよう。分量的にマーティン訳『万国公法』より少ないため、全体から見れば「権」は比較的少ない。目次からは「交際ノ権」「平

行ノ権」「居間ノ権」「自主ノ権」「興戦ノ権」「所有ノ権」「天然固有ノ権」「自有ノ権」「度外ノ権」などが見られる。中でも、「平行ノ権」「自主ノ権」は、マーティン訳『万国公法』の使用法と同様である。西周の使用した二字漢語の「～権」は次のとおりである。

威権、原権、私権、執権、戦権、全権、特権、兵権

このうち、「威権」「執権」「戦権」「兵権」は漢籍に出典を持つ語であり、「原権」「私権」「特権」はマーティンの訳語を使用していると考えられる。

『泰西国法論』は日本において、西洋国家の憲法の内容を初めて紹介した専門書であり、明治以降何回も復刻版が出され、多くの学校で教科書として使用されている。目次に短文の「権」は見当たらない。全編を通して、「住民の権」「特赦の権」「自主の権」「行事自在の権」「建社会の権」「ペチチー請願の権」が見られるが、全体からいうと、マーティン訳や西周訳より少ない。反対に、『泰西国法論』では二字漢語の「～権」が最も多く使用されている。

威権、蘊権、君権、公権、国権、三権、私権、主権、小権、人権、数権、政権、正権、全権、大権、通権、都人士権、特権、万人同権、物権、本権、民権

このうち、「君権」「国権」「私権」「主権」「特権」「物権」の6語はマーティン訳にも見られる。

ただ、「主権」の用例を見ると、津田真道は「君主之権」の意で使用しており、異なった意味となっている。

新しい造語である「私権」「全権」「特権」は三つの書物のいずれにも見られることは注目に値する。マーティンが創出した訳語と思われる新語が津田真道と西周の使用によって、日本語に移入されたのであろう。

このように、津田真道訳『泰西国法論』、西周訳『万国公法』、そしてマーティン訳『万国公法』の訳語を比較してみたところ、日本で刊行された二つの書物はいずれも積極的に漢訳『万国公法』を借用していたことが確認できる。「～権」にまつわる用語として、津田真道の訳語の完成度が高く、二字漢語の使用が最も多いが、これも、漢訳を十分理解した上で、新しい造語活動が展開されていたと認識してよいであろう。

## おわりに

冒頭で挙げたチャン・ジャンンの論文には、次の指摘も見られる。

マーティンの担当した部分は、原作の粗筋の口頭訳で、西洋国際法における法的概念や専門用語に当てはまる漢文体の訳語の選定、または新造語の提案と選択など実際の翻訳上のさまざまな決定は、必ずしもマーティン一人の意志によるのではなく、他の参加者もある程度の寄与があったことは、十分に考えられる。もしそうだとすれば、一人マーティンの寄与のみならず、今日までほとんど見過ごされてきた彼の協力者の



業績をも認めるべきであろう<sup>24</sup>。

確かに、より広範な角度から見れば、Wheaton の原著 *International Law* が中国に持ち込まれた時点から刊行されるまで、次のようないくつかの特徴が見られたのである。

- ① 翻訳過程の及ぼす空間：アメリカから持ち込まれ、上海で翻訳が始められ、北京で終了するといった、極めて広い空間の中で、翻訳作業が進められていたと言える。
- ② 完成にかかわった人数：翻訳協力者、そして校訂者の官僚を含めると、直接関わった中国人は 8 人もいる。書名に影響を与えた可能性が考えられる総理衙門大臣の董恂を入れれば、中国人は 9 人にのぼる。間接的に関わった人物を数えれば、もっと膨大な数になるであろう。この点は、それまでの漢訳洋書の中で、極めて異例のことである。
- ③ 中国人の社会的地位のばらつき：生徒もいれば、いわゆる条約港知識人もいる。下級官僚もいれば、高級官僚もいる。社会的地位に関係なく、同じ目標の下に協力し、作業するケースは異例と言えよう。
- ④ 共同作業のパターン：既に宣教師と協力者の「口述筆録」といった域を超え、対面しながら、グループによる「悉心商酌」が展開されていたのである。

これらの特徴はいずれも漢訳『万国公法』の完成度を上げる原動力となり、その力は国際法のパワーと重なって、東アジア、特に日本に大きく影響したのであろう。

参考文献：

- Federico Masini 著（馬西尼）、馬河清訳（1997）『現代漢語詞匯の形成—十九世紀漢語外来詞研究』漢語大詞典出版社。
- Frederick Wells Williams 著、顧鈞・江莉訳（2004）『衛三畏生平及書信』廣西師範大学出版社。
- Richard J. Smith, John K. Fairbank, Katherine F. Bruner 著、陳絳訳（2005）『赫德与中国早期现代化—赫德日記（1863–1866）』中国海関出版社。
- Rune Svarverud（魯納）、王笑紅訳（2000）「万民法在中国—国際法的最初漢訳、兼及『海国図志』的編纂」『中外法学』（北京大学法学院編）卷 12 第 3 期。
- W.A.P. Martin 著、沈弘・惲文捷・郝田虎訳（2004）『花甲憶記—一位美国伝教士眼中的晚清帝国』廣西師範大学出版社。
- W.A.P. Martin 訳（1864）『万国公法』北京大学図書館所蔵。
- W.A.P. Martin 訳、韓国学文献研究所編（1981）『万国公法』亜細亜文化社。
- 王健（2001）『溝通兩個世界的法律意義』中国政法大学出版社。
- 王文兵（2008）『丁韞良与中国』外語教学与研究出版社。
- 魏源著、陳華ほか点校（1998）『海国図志』（百卷本）、岳麓書社。
- 龔纓晏（2008）「張斯桂：从寧波走向世界的先行者」『寧波大学学报（人文科学版）』第 21 卷第 6 期。
- 曾涛（2008）「近代中国与国際法の遭逢」『中国政法大学学报』総第 7 期。

<sup>24</sup> チャン・ジャン（張嘉寧）前掲論文、388～389 頁。

孫建軍（2002）「近代日語対漢訳西書新詞の吸収和発展」『中日文化交流史論集』中華書局、283～306頁。

チャン・ジャンニン（張嘉寧）（1991）「『万国公法』の成立事情と翻訳問題」、加藤周一・丸山真男編『日本近代思想大系 15 翻訳の思想』岩波書店、381～400頁。

張用心（2005）「『万国公法』の幾個問題」『北京大學學報哲學社會科學版』第3期。

津田真道訳（1868）『泰西國法論』早稻田大學圖書館所藏。

田濤（2001）『國際法輸入与晚清中国』濟南出版社。

西周訳（1868）『万国公法』早稻田大學圖書館所藏。

熊月之（1994）『西學東漸与晚清社会』上海人民出版社。

李文傑（2010）「總理衙門總弁章京研究」『史林』第5期。